51　1868–1869年に米国海軍医として日本中心に勤務したボイヤーの日記について

布施田哲也
公立丹南病院

ジョセフ彦（1837–1897）の自叙伝である“The Narrative of a Japanese”（Yokohama Prtg. & Pub. Co., Ltd. 1894）の中に1868年（慶応4年）京都にいた第10代肥前国佐賀藩主の鍋島直正がリウマチスによる疼痛によって衰弱著しく外国医師の診察・診療を受けたという記載がある．天保山沖に当時停泊していたアメリカ海軍「イロコイ号」の軍医であるボイヤーが，ジョセフ彦と佐賀藩の依頼を受け京都へ診療に行き，その結果鍋島直正は健康を回復した．またボイヤーは京都に入った最初の米国人となった．ボイヤー自身も日本滞在当時の日記を残しており“Naval Surgeon: Revolt in Japan, 1868–1869”（Indiana Univ Pr. 1963）として出版されている．この日記の中には京都での医療支援以外に当時の医療に関する記載がある．

サミュエル・ペールマン・ボイヤー（Samuel Pellman Boyer 1839–1875）はペンシルバニア州で生まれた．オランダ入植者の先進気質を保持し，ジェファーソン医科大学に入学しペンシルバニア大学医学校にて1862年3月に医師の資格を得て以降海軍に入った．彼の日記はこの本と米国南北戦争の際の海上封鎖作戦をつづった日記“Naval surgeon: Blockading the South, 1862–1866”の2冊が刊行されている．

ボイヤーは，1868年2月11日にニューヨークを出発しパナマ，サンフランシスコ経由で太平洋郵便汽船グレート・リパブリック号にて1868年4月7日に横浜に到着した．到着した時期は，幕府軍と新政府軍との間で戊辰戦争がおこなわれており新政府軍が江戸城に攻撃しようとしていた時期であった．その後アメリカ海軍のアジア艦隊に所属し1869年11月1日に太平洋郵便汽船ジャパン号にて横浜より帰国するまで，横浜，兵庫，長崎，佐渡，函館，香港，台湾，マニラ等を転々としながら，各地の印象を日記に残している．この時期の外国人による日本印象記には，アーネスト・サトウの「一外交官が見た明治維新」，オールコックの「大君の都」等が有名であるが，米国人によるものは少ない．またボイヤーは，二つの国の内戦を身近で経験したことになりその点でも貴重な記録となっている．

1868年7月29日に京都に入ったボイヤー軍医は鍋島直正の診察をおこなった．直正の臨床経過および診察より衰弱の原因は大量の鉛投与によるものとボイヤーは診断し，彼の治療によって鍋島直正は健康を取り戻した．同伴していたジョセフ彦も西洋医学の効果は絶大であったことを記載している．またこの医療支援については，鍋島直正の「診察御日記」やアメリカ外交文書にても確認できる．

その他，各開港地において，性病（梅毒と淋病）が蔓延していたことがわかる記載がある．またボイヤーの日記には，佐野常民，新宮凉民，相良知安など医学史で有名な人物との交流が記されている．

医学に関して注目すべき記載は以下の通り多岐にわたる．

1. 航海中に死亡した中国人の水葬について
2. 米国人として初めて京都に入り，重病の鍋島直正への医療支援
3. 佐賀藩医の相良知安が鍋島直正の病状経過報告にボイヤーを2回訪問している
4. 開港地・海軍内における性病蔓延，および性病に関する医療の記載
5. 兵庫県立病院で医療監督の立場にあった元海軍医ヴェッダー医師（Alexander Madison Vedder）と兵庫で会っている

本書が日本国内で話題になったことは殆どなく，医史学的にも貴重とおもわれるボイヤーの日記について全容の紹介も含めておこなう．